宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ㊐ 1311 代
定価 一年送料共 1000円

遷宮記念祭

第七回 西日本菊花大会盛会に終る

期間 11月1日～11月20日

錦秋の御社頭

延三〇〇、〇〇〇人の参拝者で賑う

――本大会始まって以来最高の人出を記録――

昭和四十二年より四年余の歳月をかけた宗像大社御復興遷宮事業が完成した同四十六年十一月十二・十三日、勅使御参向を仰ぎ厳粛盛大裡に御遷宮大祭・奉祝大祭が斎行され以来早くも今年で七年目を迎えることとなった。

当大社では、この日をトして毎年遷宮記念祭を執り行っている。今年は例年になく好天に恵まれ、十一月十三日早前十時より遷宮記念祭が、菊花の香り漂よう拝殿で厳粛に斎行された。

又、御社頭に於いては、御遷宮を奉祝記念して、十一月の初めより、西日本菊花大会・奉納書道大会・剣道大会・吟詠大会・囲碁大会・短歌大会・盆栽展・玄海町文化祭等の各種神賑行事が盛大にくり広げられ、特に今年からはカルタ大会も加わり一段と盛況さを増し、御神徳の発揚を深めた。

中でも、西日本菊花大会は、昭和四十六年の宗像大社御遷宮・奉祝大祭を機に結成された宗像大社菊花会を中心として開催され、早くも七回目を迎え、年々参加作品も増加、名実共に西日本一の規模を誇る大会となっている。

菊花大会の会場となった境内には、陳列用ハウス百余棟が仮設され、十月下旬より福岡県内の菊花搬入に始り、佐賀・長崎・熊本・大分・山口県各地の菊花、三千余点が延べ六千数台のトラックで続々と搬入され、大会初日である十一月一日には、見事な菊花会場となり、広い境内は馥郁たる菊の香りにつつまれた。

菊花大会期間（十一月一日～二十日）は幸にも好天に恵まれ、参拝参観者も期間中で三十数万人に達した。特に土・日・祭日は大駐車場を始め予備駐車場も満車状態となり、空所まちの車が県道添に長い列をつくる程で、御社頭は正月、秋の放生会並の賑いであった。

又、十一月十五日は七五三祭の佳日で、当大社では十三日より二十日迄祭典期間を設けていたが、七・五・三才になる約五千人の子供達が県内外より家族連で参拝、祭典終了後菊花を背景に記念写真撮影や展食をする姿が各所で眺められた。

――◇――◇――

第七回西日本菊花大会 表彰者名

特別賞
最優秀模範作品賞　遠賀　高島雪茂
内閣総理大臣賞　島栖　時田義光
農林大臣賞　小倉　呉屋太郎
文部大臣賞　春日　海藤義太郎
衆議院議長賞　粕屋　高原鹿吉
九州農政局長賞　若松　平野直義
以下三面に続く

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園二―三一（〒八一三）
電話福岡（九）六五―一九四五六番
京都出張所 京都市下京区油小路三条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三三四一（代）四番
・一〇六六番

◇御案内◇

年越の大祓式

――十二月三十一日 午後五時――

拝啓

歳末御多端の折柄貴台益々御健勝の趣き慶賀に存じ上げます。扨て、恒例の年越大祓が近まって参りました。この神事は諸様方の心身の汚穢を祓い除け、無病息災・家運隆昌を祈念して、心身共に清々しい、新春を迎える神事であります。本年も左記により、大祓神事を斎行致しますので貴様お誘い合せの上、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

敬具

昭和五十二年十二月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

特別崇敬者　各位

――◇――

記

一、十二月三十一日　午後五時　大祓神事斎行
一、一月一日～十日　新年交通安全大祈願祭を斎行

論説

学習のスポーツ化とその抑制

先着何名に無料進呈の広告が出ると、翌朝のデパート入口は定刻前からひどい行列が出来る。デパートに限らず人気と宣伝に効果を狙う商法である。商法に競争は付きもの、この傾向は利得を間題としない教育の場にも存在する。

最近社会事象の中で特に目に立つ顕増の一つに学習塾がある。学習雑誌や受験参考書の氾濫も、商業主義から出発、それが学習塾の開設を誘う。高い月謝と多過ぎるほどの収容人員、儲かること間違いなく、これを規制する法規までは用意されていない今日、需要と供給の原則は続く。

少い上級学校、その入学許容人員では、需要供給のバランスが取れることはなく、激しい競争は当然の帰結と言えよう。能力以上の進学に狂奔するのは、本人よりも家庭で、殊に母親の虚栄心とも指摘される功利主義が、子弟の尻を鞭して学習商店を買う。金儲けのためなら一種の商店、マーケットと悪口る者さえある。

福祉興利を目標に改進する社会、それを異付ける政治も国民の要望する方向へ動く。消防施設や救急車が充実し、猫の病気まで「一一九番通報」の非常識まで現れる仕末だが、教育方面も無制限に増設することは財政その他許さぬ条件の抑制を受ける。

ここで話を転じて、先般読んだソ連の教育の共鳴する点をあげて、わが国の評論まで引き起している教育現場の教師と、それを規制する行政の管理機関との喰い違いを考えてみたい。

率直に言ってソ連の教育現場は実社会と直結する。日本の悪い伝統を固執する形式主義とは、著しい異色を感ずる。

ソ連の新学期開始は九月であるが、進級落第を決めるために学年末試験の施行は日本と同様である。然し、形式主義に陥ら為れた考え方を受験風景に見る。二名の教官が受験学生の監督に当るが、それはカンニングや不正を監視する態度ではない。答案に甚しく苦慮してペンが進まぬ学生があると、教官は何すを所に寄せて学生に難解個所にヒントを与えたり、必要な助言を言葉にしたりする。教官もその学生も不正な方法で合格点に達する答案を作製しているとは思っていない。助言の効果は落第を免れて進級を得る。

教官のこの場合の教育上の理念は、監視する態度の日本の場合とは根本的に異質のものを感じさせる。その助言を受けた学生は解り難い点をよく消化して、自身の能力で答案を書いたのである。カンニングでも参考書の引き写しでもない。書けただけ自己の学力になっている。ソ連の教育はこう思っているのである。

猫の病気まで救急車を呼ぶ民主化日本に、この理念は生れないであろうか。学年末試験は落第者を判別したり、点数の多少による序列を定めたりするのが目的でない。どこまでも学力を養い、実社会に役立つ能力の根源を頭脳に会得する所に置かねばならないとする。日本でも共鳴者は少くないであろう。

殆んどのスポーツが勝負を結着とする。学習塾で実力を獲つのは多くの場合入学試験に勝つためで、序列を決められる学年末試験とは異る。無制限に入れられぬ志願者に対し、競争試験を課して優劣を争う。定員に該当する人数はこの方法以外にない。

受験生とその父兄の熱意は、学習塾の成果に自信のないものほど強く、新聞紙上に溢れ出る不正事件を暴露する。教師や管理機関の担当者を金銭が誘惑する。裏門入学、試験間題漏洩みな多額の金が種々の経路から流れている。

驚くのは幼稚園の入園競争である。大学医科の寄付金と称する不正入学賄賂三万円ほどでないにしても、幼稚園は幼稚園なみの数十万円が動く。競争のある処勝たねばならぬ、幼稚園とて変りはない。ただ幼児だけに本人より家庭特に母親に、入園地獄突破の強い悲願が燃えるのである。

昔は「神聖」なる文学が、教育界だけは至極常識的に用いられていた。聖職が利害得失を越えた教職にのみ許されていたが、教師の組合がこれを抛棄し労働者と名乗って消してしまった。然し、労働は神聖なり。労働者と名乗っても聖職の文字を失うことはあるまい。功利主義の醜悪面が、教育界を汚濁して暗路賄賂の模行となっている現状は、嘆かわしい世相の最大のものである。

阿蒙少言

奇想天外と言えば、大げさな表現になるが、人間には思いもよらぬ時、平素全く関心もない記憶の底辺が蘇えることがある。人間ドックのベッドはまことに気楽、フト空白の意識ラインに古歌が浮ぶ

一相見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり／●この詠み人が誰であって、どんな心境を文字にしたものか、それはどうでもよい。中年老年の人生観、現代生活の中に何かを探し当てて歌意を思ってみる●若い頃交渉のあった異性、先輩友人、別れて何年か或は何十年かの歳月経過、その間職務上の苦労を重ね浮世の義理人情に忍苦耐乏の修練を積んで、老いて再会した時の感慨は深いものがある。異性との交渉の場合は、はかない恋愛が結ばれ得ずして去ったこともあった●昔のそんな事情を思わなかったところではないが、今日修練を経ねて出来た人生観から顧れば、物思わぬにひとしい浅薄単純なものであったとする。流行のテレビや雑誌の人生相談も、その呼吸を反露している。評論家の説く幸福論に於いても、職務の責任とか仲間の義理とか、外見幸福に見えても内容を半減している場合も少くない●最近のスポーツ新聞に、往年の名監督名選手として知られる人達の回顧談など載せていた。中に、昭和三十六年から四十九年まで巨人軍の監督を務め、肥後人の一徹を通して、ジャイアンツ優秀選手を育てた川上哲治氏の記事があった。連覇を達成、日本一の幸福に見える彼も悩みはあった。監督時代が一〇なら今は九〇か一〇〇の幸せですね／長島に監督を譲った直後の談話である●少言では去る二月島原に旅して、ライオンズの練習宿に泊り、偶然視察に来ていた川上氏を見た。翌日は船中で彼の思い出話など聞いたが、隠居暮らしの現在、彼の所懐に同感する点が多い。（白雲）

第九七回 宗像大社歌会詠草

毎月一日／切　詠草到着順

津屋崎　内田　久美
理由わけて話さむと思いつゝ耐えて来し十幾年さは忘れむ
武丸　原田まつ代
いね難く歌書読み居れど虫の音も難聴老いに秋の夜さびし
福岡　吉田　信夫
朱や緑いろとりも濃き柿の葉を拾ひてならべ眺したのしむ
宮田　片山　一
秋の陽のほてりに伸びてマツバボタン花鮮やかに蜂の群れるる
箱崎　吉村　三郎
岸壁に四隻舫う自衛艦秋日を受けて砲塔の輝く
田熊　吉田　直志
金色に実る稲田の天育ノコンバインの音はリズムを刻む
原町　八波　五月
ばらの棘刺さりし指の夜もすがら云い過ぎし悔いと重なり咎く
鐘崎　村田　四郎
湯川山の山端にいでしみち月の光りきらめく鐘崎のみなと
鐘崎　岩瀬　辰夫
恋ふる夜の勤務を果したり朝飼まさず妻は待ち居り
宗像　中村　幸
落ちかかる夕陽のなかの芒穂のこぼす光を見て帰りきぬ
池田　永富　臻
朝霧が睫毛を濡らす山径を遍路の吾と妻は歩きぬ
田久　小方　実
引きのばし掲げし額の亡き妻がもの云いたげに吾を見ている
福間　広渡一寸毛
ユーモアの逸話残せしヌゼーの碑は草渡に永く居眠る
深田　中野　節子
紅葉を始めし樹海ゆきゆき時折り現はるるすずみの宿士
香椎　桜井　ツ子
落ちかかる夕陽のなかの芒穂のこぼす光を見て帰りきぬ
宗像　中村　幸
恋ふる夜の勤務を果したり朝飼まさず妻は待ち居り
鐘崎　岩瀬　辰夫
朝霧が睫毛を濡らす山径を遍路の吾と妻は歩きぬ
池田　永富　臻
引きのばし掲げし額の亡き妻がもの云いたげに吾を見ている
福間　広渡一寸毛
ユーモアの逸話残せしヌゼーの碑は草渡に永く居眠る
深田　中野　節子
紅葉を始めし樹海ゆきゆき時折り現はるるすずみの宿士
香椎　桜井　ツ子
忘きまして帰り来ませ人名なきあの世の事を問ってやもなし
名古屋　野崎　傳三
宿院の更けゆくままに寺山の遠き滝の音近づき聞ゆ
田久　立花　勇雄
柿を挽く樹上の吾れに気付きしか下校の児らは遂く手を振る
福間　宮本　勝弘
晩秋に河辺の芒嬌やかに次々とゆれ秋さりとむ
福間　田中　俊子
みな冬づく釣山の洲に白鷺の魚を待つつ寒々と佇つ
福間　石松や寿子
蜜柑狩の招待あれど農繁期膝を痛めて遂に行き得ず
田熊　鷲津かつ代
虚子の句碑ひそけきあた竹寛に浮えてつはぶき咲けり和布刈の宮に
東郷　田中　春子
旅の日の暮るる新幹線の停車駅にサウナのネオン点滅しおり
宮田　北原　君子
裏廻に大豆みのりて吹く風にうねりの如くゆるゝが見ゆる
武丸　原田　リノ
籾搾り籾殻なる家族の服を洗ひ庭に二竿乾し並べたり
津屋崎　谷口　礼子
えにしだの黄色もえたりこの夏の年の占如何なりやと
東郷　藤崎　辰子
涸沼と蓮沼と分つ一本の道が乾きて海へつつける
田島　吉武　武雄
丸木橋渡りて辿る山肌に龍笛揺れて山鳥のたつ
須恵　早川　ふき
白と藤のリラの草木を求めたり三才の孫の祝に詣でて
武丸　立石　昇
池のなか鯉は動かず水澄みて山茶花の白片水面に浮ぶ
田熊　今村　重刀
菩提寺の木立をわたり来る風もお会式今は寒さおぼゆ
戸畑　田中ハツセ
つと立ちし和服の女より漂ひしや香にあらためて見入る
田島　楠　理
雨降ればよくぬかるみ町の道きよう竣工のアスファルト光る
吉武　白木うめの
ことごとく散りし柿の葉さみだせるいく枚か捨ひ掃きあめて焼く
武丸　立石ろせ乃
吾のため娘が縫ひくれし座布団の厚きに坐りてひとり本読む

遷宮記念祭

各種神賑行事盛大に行わる

―剣道・柔道・吟詠・囲碁各大会―

◇奉納剣道大会

去る十一月三日午前九時より恒例の遷宮記念祭奉納剣道大会が本殿脇の境内にて開催された。

この大会は昭和四十六年の遷宮を記念し、福岡県剣道連盟の主催により開催されている。試合方法は個人戦で選手のほとんどが小中学生を中心とする郡内の住民である。本年より小学生が従来の二段階より三段階に分かれ、また女子参加者の増加により新しく女子の部が設けられた。

心配された天候も空は青く澄み渡る秋晴れの好天に恵まれ関係者をほっとさせた。

開会の時刻には小学生より一般までの約五百五十名の選手が整列し、本殿に挙礼した。ついで花田支部長の挨拶、審判の諸注意の後試合開始となった。

白熱した試合が展開されたが、とりわけ竹刀の方が背たけより長いような小学生の豆剣士には詰めかけた多勢の観衆よりさかんな拍手がおくられた。

日頃は静かな神気漂う境内もこの日ばかりは、はげしい気合と竹刀の音が響き渡った。

日頃の稽古の成果を出した熱戦も二時すぎには終了した。

成績は次の通りである。

◇男子の部

小学校一・二年

優勝　高向新太郎（玄海小）
二位　天野聡一郎（神興）
三位　永島　久成（玄海）

小学校三・四年

優勝　田中　広樹（士道館）
二位　赤星　範行（東郷）
三位　小沢　優（河東教室）

小学校五・六年

優勝　今永　直樹（東部教室）
二位　岩瀬　清貴（岬）
三位　八田　健一（河東教室）

中学校

優勝　八尋　邦也（福間）
二位　石松　康弘（中央）
三位　矢原　吉房（玄海）

高校

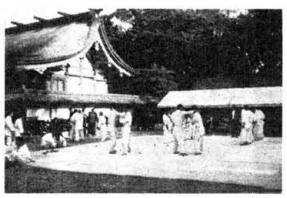
優勝　村田　道広（東海第五）
二位　八田　大孝（東海第五）
三位　松尾　二郎（東海第五）

大学・一般

優勝　吉井　薫（東部教室）

◇奉納柔道大会

菊花薫る十一月五日、午後一時より第五回宗像郡中学校柔道大会新人戦が本殿横広場におこなわれ熱戦が展開された。



当日早朝から選手達は緊張の面持で校庭に集まり早速準備運動に一汗流し本大会に臨んだ。

定刻宗像郡柔道協会森会長の大会挨拶の後、大会の無事を願って御祓いを受け試合に入った。

試合は団体戦、個人戦が行われ好試合が続出した。

大きな選手相手にところ狭しとばかりかく乱戦法に出る小粒な選手、自分の体重に自爆する大型選手等々バラエティーに富んだ組み合せもあり、立ち見の参拝者も思わず、あ、おゝの声援ともつかぬ歓声があちこちできかれた。

以下成績次の通り

◇団体戦の部

Aパート　優勝　津屋崎中(A)
二位　福間中(A)
三位　中央中(A)

Bパート　優勝　中央中(B)
二位　津屋崎中(B)
三位　玄海中(B)

◇個人戦の部

優勝　永島美信（津屋崎中）
二位　倉員　武夫（教育大）
三位　森　謙二（教育大）

◇女子の部

小学校二・四年

優勝　藤本　佳枝（東部教室）
二位　吉永　美樹（宗間教室）
三位　福本　早苗（南郷教室）

小学校五・六年

勝優　花田　理加（士道館）
二位　天野真由美（玄小）
三位　松本　法子（玄小）

中学・高校

優勝　北城百敏江（城山中）
二位　姉川　詳子（城山中）
三位　永尾　朱美（宗高）

以上

◇奉納吟詠大会

錦秋の十一月三日、宗像大社秋季奉納吟詠大会が本殿横宿衛舎にて盛大裡におこなわれた。この奉納吟詠大会は春・秋二回、二つの流派（春、北九州本部、鶴洲会秋、熊本本部、清香吟社）により奉納されているもので清香吟社奉納は今年で四年目を迎えた。

午前十時、会長以下会員百余名は当社祭典に参列、会長（益中鵬山）の玉串奉奠に合せ会員揮礼の後大会会場に移った。

日頃鍛えたのを思う存分発揮する地元宗像会員の面々、早朝出発し当社に着いた後早せず堂々たるお手本を示す熊本本部の会員、吟にも増して舞踊にその才を見せる会員、三人一組になり連吟の妙味さを存分に聴かす師範級の会員、尺八の三部会員等、盛り沢山のプログラムに参拝者もしばし我を忘れ聴き入っていた。大会後半は春に奉納する鶴洲会本部の師範が来賓として一吟すれば清香吟社会員も流派を超え盛んな拍手を送っていた。午後四時、三部にわかれた本大会も無事終了し懇親会へと移った。

会場では吟なら歌謡曲や舞踊等十八番が続出、あまりの上手さに〝吟もこの位上達してくれたらなあ…〟と彼の声。ともあれ大声を出せばこれ健康とばかり仲居さん広かせた大宴会が続き、午後九時来秋の逢瀬を楽しみに散会となった。

◇奉納囲碁大会

宗像大社本殿坊戦は境内に菊花咲き薫る十一月六日午前十時より当大社宿衛舎に於て行われた。この囲碁大会は今年で五回目を迎えるが、この会の参加資格は、宗像郡内に居住する段者に限られ、その中で一般選手によるリーグ戦と、これとは別に四・五段クラスの高段者十六名による本因坊戦が行われるもので、文字通り、今年の実力チャンピオンを決定する棋戦である。

宗像郡は昔から囲碁熱の盛んな土地柄で、加えて近年は団地造成により郡外からの愛好者も増え、益々盛んになっているが、これを受けて本会も年々充実し、内容の高い棋戦として発展している。

当日は大会に先立ち参加者七十名挨拶で祓いをうけ、宗像郡囲碁連盟会長松尾氏の玉串奉奠に合せ参拝をし、正々堂々の対戦を神前に誓った。

午前十時より午後五時迄、会場は和気藹々の中にも、日頃練磨の腕を存分に発揮されたものと、盤上火花を散らす熱戦が展開され、一喜一憂の星のつぶし合いが進められていった。特に本因坊の栄位をかけた決勝戦は、浅見、山根両五段の対決となり、最後迄予断を許さぬ力戦に盤側に集った観戦者は固唾を飲んで勝負の行方を見守り、会場の熱気は最高潮に達した。遂に浅見五段に凱歌が上り、三年連続宗像大社本因坊の栄位獲得という偉業を樹立して、大トロフィーを手中におさめた。

本因坊　福間町原町一区一組　五段　浅見忠雄

準優勝　宗像郡自由ケ丘一の五　五段　山根正男

お尻問答

知友や家族は、話の種がなくなると他人の身上や世間の出来事などを語り出すが、大底は他愛もない無駄話である。他愛もないと言うなら、凡そみなその仲間に入る場合が多い。人生目体が他愛もない人間の道中双六なのか。「スワ鎌倉！」緊張して聴く天下の一大事は、滅多に起るまい。

「お殿様には益々ご機嫌うるわしく、めでたく米寿を迎えられまして」と、会長が一同を代表して祝辞を述べる。お殿様の連発は、われら貧しき水呑百姓の子孫には嫌に耳にはじく。また、紋切型の祝辞は終始ゴマスリを感じる。

九州でも屈指の有力大名を先祖に持っては、その旧藩士の裔孫ともを主力会員とする団体だから、君臣調になるのもやむを得まい。昔の家来どもも、よくゴマをすったことだろう。馬鹿殿様がおだてられて、善政どころか良民を苦しめて贅沢をした藩史をのぞく気がする。百姓の子孫われらは一層強く悪政の影を思う。

これは先日福岡で開催された大名の後裔八さんの米寿祝賀会、若い頃から或る研究を続けているそうだが、どうせ殿様芸のひまつぶしだろう。途中代議士の祝電披露が入る。これも議員稼業の他愛もない芸へ、よく打つ手である。ゴマスリと同時に選挙の票集めが働いている。

何十万石の祝賀宴も他愛がないと言えば、こちらのお尻問答も同じこと。満員バス中での風来子の面目を他愛なく語っておこう。

残筆しがらみ草紙 (12)

玄陽隠士

「おじさん、押さないで」と中年女性の悲鳴に似た抗弁「押さんよ、君のお尻が大きくて、こちらが困って」と風来子の声も小さくない。「大きいお尻で悪かったですね、勝手なことを言いますね」に、乗客り身動きならぬ窮屈さの中で、クスクス笑いが起る。

次の停留所で何人か降りた。車内にやっゆとりができた「おじさん、お尻のことまで言わなくていいでしょう。とんだ恥をかいて」と、改めて中年君が抗議に出た。風来子は退屈のきに、いささかからかい気味に「事実大きい。何でも大きい方がよい。大は小を兼ねる」「みんなが顔を見ますから尻の大きい忘る強調されてはまりませんよ」と。婆は嫁に賛成する。何でも賛成型なので、嫁姑のトラブルなどわが家では絶無を誇っている。

その賛成型が出た「お父さんも人のことは言えませんよ。学生の頃、鉄棒に飛びついてもお尻が重くて足が上がらない。いつも体操の先生に押し上げられたとか」と、昔話をよく覚えている。「軍隊の時は、新兵の阿蘇山演習で裸馬に乗れなくて、よく戦友にお尻持ちを頼んだとか」まで付け加えたので、盛夏の阿蘇外輪での裸馬訓練の苦しかった記憶が浮ぶ。

戦場に奉公八年、勲章の代りに貰ったひどい胃潰瘍、十数年前に敗残の胃袋をすっかり取り出して食道と腸を直結したので、今は大食道と腸を直結したので、今は大食の割合に太らない。尻も痩せている。消化機能の主役が、一足お先に地獄へ行ってまって栄養の吸収率が甚だ低下しているからだ、と自己診断の弁が出る。

祖父が少年の日に風来子に語った処刑者の雨中行進の幕末物語。

場所は山口県の防府郡外で、長州藩の方針に反した武士数名が、その地の国分寺近くの刑場に向っていた「おい、疲れてもよいから、急がずゆるりと歩こう。先もどうせ雨ではないかしと、やがて通る死線も雨だと笑う武士達は、死を他愛もないことのように言ってのけている。人生の大事だ、お尻問答如きの他愛なさとは比べられぬ大事だったが、多くの志士達は気軽に天下の難に駆せ向い、所信貫徹のため喜んで死地に就いた。

現代に愛国者を探す様なめて困難である。名利追求、虚言粉飾、抗議訴訟など国民一般の日常茶飯事である。お尻問答とどちらが上か、どちらが下か。

こうのかなと湊 (74)

楠　早　鳥　作
福田長庵画

帰去来（その三）

出発の前日、明継は碧眼の女人を連れて管領の館を訪れた。人つかお話のありました女を伴いました▽応掲にうなずき女人を見つめる義継の瞳に好色のかげがはしり目が赤く充血した。とりとめない雑談のの女人に舞を所望した。明継が笛を乞い唇にあてると悲々とした音色が流れ出た。急調子になると女人が起ち上り舞い始めた、すぬ速い身のこなしで身体を回転させ金髪が宙に舞い、白い顔が幾重にも重って

翌朝、来た時と同様に、伏見街道の東側にたたずまいする恵日山東福寺の小高い丘の上に明継と女人は立った。〈再び都に上ることもあるまい、よく見納めておけ▽胡語で明継は語った。黙ってうなずく女人がいとおしかった。思わず肩を掻き抱こうとすると、あっと女人がおびえた。その声で反射的に防備の姿勢をとり身がまえると二人を囲むように丘のかげから抜き身の白刃を手にした武士が現れた。―刺客か、また五人もよくとは大層な明継は冷静に相手の人数を読み、女人を連れて逃げおおせぬと観念し、闘いを決心した。〈貴方たちの欲しいものは…これか▽と叫び女人の背中を強く押すとたちを踏んでころげ落ちた。予想せぬ出来ごとに動転した刺客を二人すつ明継は襲った。集団としてなら刺客に歩があったが相互の連絡がたち切られ個々の動きになる場かずをふんだ明継に利があった。―あと二人一頭の中で計算した時、腕に強い衝撃が走り掌がしびれた。悄然と刃が鳴り手からはずれた。

註（オール読物・新年号掲載）

宴はてて、いとまを告げ明継が女人をうながすと、〈その女、将軍家へ献上するはずではなかったか〉と義継がさきった。〈そのような約束を結んだ覚えは毛頭ございませぬ、献上などとはめっそうもない、この女はこれがしの想い者ゆえ山口に連れかえる所存で御座います▽乾いた笑い声をのこして女人を従えた後姿をみて義継は怒に身がふるえた。

近習を耳に寄すきつい調子で何事かいいうめた。

舞の特色である。これについては石田幹之助氏の「胡旋舞考」に詳しく記されているが、最近中国軍家へ献上するはずではなかったか〉と義継がさきった。〈そのような約束を結んだ覚えは毛頭ございませぬ、献上などとはめっそうもない、この女はこれがしの想い者ゆえ山口に連れかえる所存で御座います▽乾いた笑い声をのこして女人を従えた後姿をみて義継は怒に身がふるえた。

近習を耳に寄すきつい調子で何事かいいうめた。

中　略

陳・日本人がかれらとやっても、どうしても阿波踊にならちゃう。別に規則はなくて、みんな勝手に踊っていいんだけど。

司馬・日本人だと、ずゞゃん重心が大地に行ってまう。踊りとか武術をふくめて、日本人の体技はすべて腰を沈めるでしょう。百姓が重心を舞いあがらせるという点だけでいうと、朝鮮人はウイグル人に近い。

陳・ウイグルの踊りは爪先を立てるのが多いね。爪立ちしてクルクルまわるのが胡旋舞ですかねは。

司馬・日常馬に乗って暮している連中から生まれた踊りということなのかな。

陳・ウイグルの踊りは爪先を立て二人一頭の中で計算した時、腕に強い衝撃が走り掌がしびれた。悄然と刃が鳴り手からはずれた。

司馬・――西域のは、踊り方もいう者ゆえ山口に連れかえる所存で御座います▽乾いた笑い声をのこして女人を従えた後姿をみて義継は怒に身がふるえた。

近習を耳に寄すきつい調子で何事かいいうめた。

翌朝、来た時と同様に、伏見街道の東側にたたずまいする恵日山東福寺の小高い丘の上に明継と女人は立った。〈再び都に上ることもあるまい、よく見納めておけ▽胡語で明継は語った。黙ってうなずく女人がいとおしかった。思わず肩を掻き抱こうとすると、あっと女人がおびえた。その声で反射的に防備の姿勢をとり身がまえると二人を囲むように丘のかげから抜き身の白刃を手にした武士が現れた。―刺客か、また五人もよくとは大層な明継は冷静に相手の人数を読み、女人を連れて逃げおおせぬと観念し、闘いを決心した。〈貴方たちの欲しいものは…これか▽と叫び女人の背中を強く押すとたちを踏んでころげ落ちた。予想せぬ出来ごとに動転した刺客を二人すつ明継は襲った。集団としてなら刺客に歩があったが相互の連絡がたち切られ個々の動きになる場かずをふんだ明継に利があった。―あと二人一頭の中で計算した時、腕に強い衝撃が走り掌がしびれた。悄然と刃が鳴り手からはずれた。

註（オール読物・新年号掲載）

第六回 宗像大社献詠短歌大会行わる

――県知事賞に中原信次郎氏（糸島）――

第六回 宗像大社献詠短歌大会（主催 宗像大社歌会、後援＝毎日新聞社、協賛＝福岡県、福岡県教育委員会、宗像郡各町村）は、錦秋の十一月十一日、午前十時より清明殿大広間に於いて、県内外各地の斯界の人々二百余名が参加して盛会に執行なわれた。

大会式次第は、午前十時の献詠神事斎行よりはじまった。神前に大会応募作品集を奉献、今大会の盛況を奉告、斯道の隆昌と参加各位の無病息災を祈念、大会運営委員長立石昇氏（宗像大社歌会々長）が代表玉串奉奠を行った。

献詠神事終了後、立石昇会長、宗像大社葦津嘉之宮司の挨拶があり、次に選者の竹尾正子氏（宗像大社歌会講師・活水女子短大教授）による「総合歌会の意義」と題する講演が行なわれ、参加者一同深い感銘を受けた。

次に今大会の選者として、田口白汀（筑紫野）、老川潮（門司）、山中茂樹（戸畑）、久原喜エ門（小倉）、持田勝穂（福岡）、赤星端（久留米）、佐野とき江（浮羽）、久保田端一（若松）、加野喜久親（太宰府）、竹尾正子（宗像）氏の斯界最高の権威者である諸先生が紹介された。

次に立石運営委員長より入選作の選考方法の説明があり一同了承の後、昼食休憩になった。

大会は午後一時に再開され、応募作品の相互評が行なわれた。相互評は、河中靖喜、村上利男（小倉）両氏の司会により任意摘出の作品を出席者が相互に批評、選者の講評が約二時間にわたって行われた。次に入選歌の発表が大会事務局より行なわれた。

入選者並歌は左記の通り

――◇――◇――

▼福岡県知事賞（選者第一席）

中原信次郎（糸島）

いつしかに夕べの露がのほり来て残り稗切る鎌をぬらしぬ

▼県教育委員会賞（選者第二席）

中川みさを（戸畑）

眉目やさしき[illegible]の娘とその母の指話ひそかなり夜行列車に

▼毎日新聞社賞（選者第三席）

橋口かおる（若松）

サルビアの朱に滲む雨単線の人なき駅に秋は闌けたり

▼宗像大社賞（互選第一席）

立石ろせ乃（宗像）

車代にも充たぬ野菜を重く持ち娘の住むアパートの階段のぼる

▼互選賞（毎日新聞社賞）

二席 八波 五月（宗像）
三〃 長沼美恵子（〃）
四〃 松尾 豊（〃）
五〃 広渡 市輔（〃）
六〃 山本 泰子（福岡）

▼佳作（宗像大社賞）

一席 近藤 友美（中間）
二〃 永富 [illegible]（宗像）
三〃 中野さとし（若松）
四〃 原田 リノ（宗像）
五〃 白木ウメノ（〃）
六〃 小方 玲子（〃）
七〃 吉田ますみ（〃）
八〃 細谷登美子（小倉）
九〃 豊田 光子（八幡）
十〃 福間まさ子（戸畑）
以上（敬称略）

話題の新車をみる（三）

ダイハツ・シャレードの巻

ダイハツは、十月四日画期的な4サイクル・3気筒エンジンを搭載した新型大衆車「シャレード」（CHARADE＝謎解きの意味）を発表した。これは新しい時代のクルマのあるべき姿を解いた車と云うもので、国産ポピュラーカーの分野に新旋風をもたらすものと期待される。

開発の狙いとして、(1)快適な広さと走りの良さ(2)日本の交通環境に適したコンパクトさ(3)国内事情と時代に適した省資源・低燃費ということで、具体的には、3気筒一ℓエンジンをフロントに横置き搭載の軽量設計の5ドア・ハッチバック車としてデビューした。

車種構成は、XO（オリジナル）SG（ゼネラル）ST（ツーリング）さらにグレードの高いSGEとSTE（E＝エクセレンド）ー合計5種類のグレードをもつ。

この中、XOを除く各車は4段／5段ミッションのいずれかを選択できるが、一番安いXOで六五・三万円、最上級のSTEが七九・八万円（いずれも4段ミッション）となっている。

扨て注目のエンジンは、CB型水冷直列3気筒4サイクルOHCでボア×ストロークは七六ミリ×七三ミリ、総排気量九九三CC、圧縮比八・七、最高出力五五PS／五五〇〇rpm、最大トルク七・八kgm／二八〇〇rpmを発生。

3気筒にした理由として、メーカー側は、排出ガス対策を踏まえた上で、最も効率よく出力および燃費が得られる一気筒当りのボリュームは三三〇CC前後であるから総排気量千CCの場合、3気筒が最適との結論に達したとの旨。

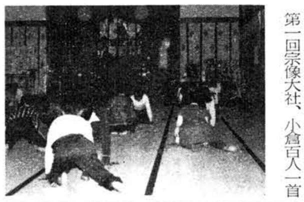
しかしクランク角一二〇度で二四〇度間隔の爆発になり独得の振動が発生するが、此の新エンジンは、半月型の錘（おも）りを付けたバランスシャフトをクランクシャフトと逆方向に回転させることによって振動を打消し、4気筒以下の振動に押えている。また利点にはエンジンそのものについても、①ピストン・コンロッド・バルブ・クランク軸受けが一気筒分無いので機械損失が少ない②吸入バルブ径が大きく爆発力が大きい③シリンダー表面積が小さいので冷却損失が小でHCの最も少なくできる。④軽量化できることなどである。

排出ガス対策は、希薄燃焼＋TGP＋2次空気導入＋EGR＋少量酸化触媒という『ダイハツ希薄燃焼方式（DECS－L）』を採用し五十三年規制値をクリアしている。

尚、一〇モード燃費は運輸省審査値で一九km／ℓと秀れており経済性を武器としている。

☆ ☆ ☆ ☆

第一回 宗像大社カルタ大会



第一回宗像大社、小倉百人一首かるた大会（主催宗像大社・九州かるた協会。後援・玄海町教育委員会・夕刊フクニチ新聞社など）が菊花薫る十一月十三日当社の境内にある建物、清明殿、斎館、宿衛舎の三ケ所において終日に渡り盛大に挙行された。

参加したのは福岡県粕屋郡古賀町の中牟田広子ちゃん（四ツ）の最年少を始め小・中・高・大学生から老人に至るまで幅広い層の愛好者等、なかには大阪市淀川区に住む八十才のおじいちゃんまでが泊りがけで参加した。西日本各地から駆けつけた参加者は三〇〇余名であった。

おりしも当大社では西日本菊花展が開催され、ちょうどこの日が菊の各賞発表の日でもあり、当社の境内は優雅なムードがただよっていた。

競技に先立ち、神前においては第一日のかるた大会の奉告祭が斎行され厳粛な中にも荘厳な神事であった。祭典終了後、当社の宮司葦津嘉之大会委員長の挨拶に続いて東京の全日本かるた協会伊藤秀文会長、大阪の深田郷風副会長を始め地元の伊豆県会議員、高橋玄海町長他の来賓祝辞を頂戴した。

特に伊藤会長の挨拶では、第一回宗像大社かるた大会に三百余名からの多くの選手が参加されたことは、かるた大会始まって以来の出来ごとであり、まさに日本一の大会であると発表され、それにふさわしい大会の盛り上がりであった。

参加者の中には「第二十一期、全日本かるたクィーン」の山口県小野田市、小野田高校三年生堀沢久美子さん（一八）の技が人々の目を引いたようである。

競技は延々八時間におよぶ熱戦の末、次のような成績であった。

A級（有段者）

優勝 吉田 彰（小野田市）
準優勝 浜本洋子（小野田市）
三位 野村正孝（宇部市）
井口まり（福岡市）

B級（一般）

優勝 氷川喜美子（長崎市）
準優勝 田中 チヨ（長崎市）
三位 大石登喜子（尼崎市）
西川好太郎（島根県）

C級（中・高・有段者）

優勝 堀沢久美子（小野田市）小野田高校三年
準優勝 友田[illegible]恵（下関市）文洋中学校二年
三位 岩本弥生（下関市）文洋中学校二年
殿崎雅章（福岡市）筑紫ケ丘高校二年

D級（高校生）

優勝 沖 幸（福岡市）筑紫ケ丘高校一年
準優勝 福岡浩美（福岡市）筑紫ケ丘高校一年
三位 吉武由美（福岡市）筑紫ケ丘高校一年
相川文武（佐賀県）武雄高校一年

E級（中学生）

優勝 神崎紀子（下関市）文洋中学二年
優勝 田中章公（下関市）文洋中学一年
準優勝 山口真弓（下関市）文洋中学二年
準優勝 下野浩通（下関市）文洋中学一年
三位 川本五十鈴（下関市）文洋中学二年
三位 赤瀬竜平（下関市）山の田中一年
三位 磯部早苗（下関市）山の田中一年
三位 的野嘉寛（筑紫野市）二日市中一年

F級（小学生四年以上）

優勝 相川裕子（福岡市）和白小六年
優勝 吉武厚司（粕屋郡）古賀西小六年
準優勝 増永秀敏（粕屋郡）古賀西小六年
準優勝 増永利幸（粕屋郡）古賀西小四年
三位 真木祥子（宗像郡）日の里東小五年
三位 村山正治（粕屋郡）古賀西小六年
三位 北崎一吏（粕屋郡）古賀西小六年
三位 松岡聖（粕屋郡）古賀東小四年

G級（小学生・三年以下）

優勝 中牟田京子（粕屋郡）古賀西小三年
準優勝 徳永光美（大牟田市）平原小三年
三位 中原幸枝（大野城市）大野南小
三位 桜井裕子（宗像郡）日の里東小三年

第五回 奉納盆栽展好評裡に終る

ー大・小盆栽百鉢展示さるー

第五回・奉納盆栽展が当大社祈願殿参拝者ロビーに於いて十一月十一日より十五日迄の五日間にわたり盛大に行なわれた。

今回の盆栽展には、玄海町二十三席、宗像町十席、古賀町三席の計三十六席（一席三鉢）の松・梅の大盆栽から、紅葉、クスのミニ盆栽まで大小様々の鉢が広い特設会場一杯に展示され、参拝者や愛好家の目をうばっていた。

この奉納盆栽展は郡内愛好家に呼びかけ去る昭和四十七年、宗像大社奉納盆栽会（会長・石松寛氏）を結成、所蔵の盆栽を展示し広く一般に見せると共に、会員相互の技術交流、一般の人々への盆栽に対する理解と技術指導を目的に始められ会員無償による奉仕により開催されている。

今年は特に境内に於いて、宗像造園業協会によるミニ庭園も特設され、盆栽・庭木の即売会も盛大に行なわれた。又、この盆栽展に特別出品として神湊在住の吉武不二夫氏（元造船業）の苦心作「船」四隻も展示され、内一隻は終了後、当社へ奉納された。大社としてはこの船を「海上神幸祭の御座船」として長く保存することにし、同氏の協賛により「神輿」をはじめ付属品も揃えることにしている。

第八回 玄海町文化祭行わる

ぽかぽかと小春日和を思わせる去る十一月十五日、七五三祭と西日本菊花大会で賑う、宗像大社宿衛舎に於いて、昭和五十二年度・玄海町文化祭が盛大に行われた。

この文化祭は町内の特に成人の方の「文化的な心を培うと共に、文化的趣味に取組んで、より一層の教養を高める」ことを目的として行われているものである。この意味に於いて出品物は、手芸品を始めとして、県展に入選した百号大の絵画の大作、昔を偲ぶ鐘崎港の風景画、玄海の四季折々の風景を写した写真作品、各流派の見事な活花展等、町民の手作りになる二百余点の作品が展示された。

また奥の部屋には、この一年間老人大学に学んだ受講生の手による水墨画等や、今年は小学生の見事な習字の作品も展示され、尚一層の華やかさと文化の香り高いものとなった。

又、恒例の家庭用品即売会も同時に行われた。この即売会は各家に於ける盆・正月の贈り物を始め多くの不用品等をお互に持ち寄り希望する人々に格安で販売して、より効果的に利用し物を大切にする心掛けを養うことを目的に行われている。今回も多数の出品物があり、多くの人が集まり大変意義のあるものであった。

この文化祭は町主催の文化祭であるが、準備から運営管理、後かたずけは主として玄海友好婦人クラブ役員の方々によってなされている。ここに紙上を借りて厚く御礼申し上げると共に今後一層、町文化の発展昂揚の為、協力を賜わるようお願いする次第である。

――寄稿・玄海町――

第七回 西日本菊花大会表彰者名

【大輪の部】

福岡県知事賞 三井 黒岩九州男
熊本県知事賞 熊本 中山 一郎
佐賀県知事賞 佐賀 松尾 為夫
福岡県議長賞 久留米 高山 勉
〃 門司 駒山 直次
宗像大社賞 福岡 吉田吉之助
〃 粕屋 長崎弥太郎
県教育委員会賞 八幡 石打伝四郎
〃 春日 海藤義太郎
県農林事務所賞 熊本 田上孝一
〃 粕屋 中野 真
九州山口花キ連賞 嘉穂 川崎正木
九州花市場連合賞 門司 奥野勝彦
西日本新聞社賞 福岡 宗 秋夫
〃 佐世保 浜田三郎
宗像大社菊花会々長賞
〃 佐世保 大平喜代松
〃 粕屋 青谷貞五郎
〃 佐賀 葉瀬垣元夫
福岡商工会議所賞 熊本 中山ユキメ
県花キ連合会賞 宗像 吉崎三吉
熊本県花キ農協長賞 熊本 村田定美
佐賀県花キ連会長賞 武雄 松永伝栄
福岡県花キ市場賞 福岡 古屋謙助
〃 門司 井手正明
テレビ西日本賞 宗像 吉崎千代子
〃 八幡 高田 太助
宗像大社氏子会賞 熊本 村上 実
〃 門司 池上福元
宗像郡町村長会賞 八幡 加藤忠雄
〃 〃 矢野正勝
〃 福岡 松原勇太郎
〃 飯塚 石坂寿英
〃 八幡 阿部武男
〃 戸畑 松岡勝美
宗像農協組合長賞 武雄 青木藤見
〃 佐世保 溝口勇三
玄海町長賞 八幡 武井カオル
〃 〃 惣浜 竜市
〃 佐世保 横道藤人
宗像青年会議所賞 八幡 山崎正親
〃 佐世保 松田二観

【盆栽の部】

福岡県知事賞 宗像 吉田 耻
福岡県議長賞 久留米 早川巳之助
宗像大社賞 佐世保 山下 一男
県教育委員会賞 佐世保 志岐公平
県農林事務所賞 〃 北川俊八
九州山口花キ連賞 〃 大平喜代松
西日本新聞社賞 佐世保 七熊 新
〃 遠賀 高島雪茂
宗像大社菊会長賞 佐世保 馬場正晴
〃 久留米 水田純子
県花キ連合会長賞 小倉 千々和正信
〃 久留米 末安和之
県花キ市場賞 佐世保 岡林 弘
テレビ西日本賞 小倉 杉山雪鳳
〃 佐世保 前田吉次郎
宗像大社氏子会賞 若松 谷崎 勇
宗像郡町村長会賞 八幡 吉田雪岩
〃 福岡 中山 保
〃 佐世保 井川晴巳
宗像農協長賞 小倉 石本 頌雪
玄海町長賞 飯塚 安永秀喜
〃 小倉 坂井雪文
宗像青年会議所賞 小倉 竹内雪豊

【懸崖の部】

福岡県知事賞 佐世保 志岐公平
福岡県議長賞 門司 奥野勝彦
宗像大社賞 門司 佐野 功
県教育委員会賞 若松 大森忠夫
九州山口花キ連賞 佐世保 馬場正晴
〃 宗像 吉崎千代子
県花キ市場賞 宗像 吉田重三郎
宗像大社氏子会賞 宗像 北川俊八
宗像郡町村長会賞 若松 平野ハツエ
宗像農協長賞 飯塚 伊藤富夫

【特作の部】

福岡県知事賞 嘉穂 川崎正木
宗像大社賞 小倉 杉下雪峰
九州山口花キ連賞 八幡 波多野松男
九州花市場連合会賞 小倉 竹内雪豊
西日本新聞社賞 戸畑 三浦常男
宗像大社菊花会長賞 門司 駒山直次
全日本菊花連盟賞 若松 平野直義
県花キ連合会長賞 八幡 塩川辰雄
テレビ西日本賞 鳥栖 時田義光
宗像大社氏子会賞 佐世保 林 正人
宗像郡町村長会賞 武雄 松永伝栄
〃 門司 池上福元
宗像農協長賞 八幡 阿部武男
玄海町長賞 戸畑 三浦常男
〃 八幡 加藤忠雄
〃 宗像 小沢新助
宗像青年会議所賞 大分 安部由夫
〃 八幡 石打伝四郎
〃 宗像 嶺 正雄
優秀特作賞 大分 見崎久義 外 五 名

宗像大社歌会 俳句作品集（一七九）

藤沢玄洋子
大神も出て賞でませ菊花展

田熊安部ゆき
野遊びの豆柿土産絵葉取り
末枯るゝ素人庭師長塚子

福岡吉田春子
草紅葉白磁の皿こうかべけり

福間広渡一寸毛
田薬に手製の味噌や辛の味
秋鯖の胡麻和え旨し旬の味

鎌崎岩瀬辰夫
五年目に誉められる程の菊が咲き
稲刈機落穂拾いも過去の夢

津屋崎井浦良介
海苔採へ夕日は限りなく届くく

福間二宮未子
はぜの木に捕縄かけにしたかずら

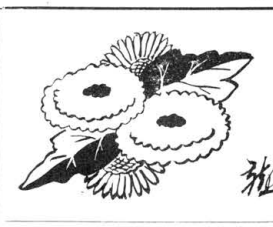
名古屋野崎傅三
青空へ師走の市の声高し
餅米を母のもて来る年のくれ

土穴八尋恒夫
幸あれと妻買ぐしの年の暮

福間木梨よしの
秋雨にみだれし庭の黄菊かな
山茶花の咲いてもう散る庭の秋

田島有吉唐水
寒月や大売出しの赤い旗
救急車音も鋭しその月

宗像岡田陽水
秋深し丸木橋渡る路がち



海の寄物

最古の寄物と海の幸

いしいただし

（五）

十数年前になる。糸島郡志摩町にある御床松原遺跡（みとこ松原遺跡）、この遺跡は新の王莽の貨泉が出土したところで著名）は土砂採取で遺跡の大半は破壊され、土砂採取した所は、大きな凹地となり、養魚池になっているが、雨が降る度に、池は浸食を受け、包含している土器や石器があらわれる。そんな遺物を採集するために、よく養魚池へ行ったが、池には多くの軽石が浮かんでいた。「こんなところに軽石なぞ」と不思議に思っていたら、明らかに加工されたものを見つけた。楕円形の長さ七・七センチ、幅四センチ、中央よりやや上にハミリの穴をほがしたものである。漁網に使用する浮子（うき）である。

一九七二年に粕屋郡宮町にある鹿部山（ししぶやま）遺跡の調査がおこなわれ、幾度か発掘を見学に行った。鹿部山のふもとにある遺跡、この遺跡は粕屋郡宮町東町（とうのまち）遺跡では、水田下の調査がおこなわれ、そこからは約四十種に及ぶ弥生時代の木器類が発掘されたが、水田下の調査で、トレンチは湧水のため、水が溜ることが多かった。水の溜ったトレンチを見ていたら、軽石が一個浮んでいたのを見て、御床松原遺跡のことを思い出した。一九七三年に「鹿部山遺跡」として、報告書が発行され、軽石の出土も報告されていた。調査者は、材木の擦り石か、浮子との二面を考えているようだった。御床松原遺跡の時には、まだ漂着物に関心を持たなかったが、鹿部山遺跡では海歩きをして二、三年目で、海岸で多くの漂着物に混じって、軽石の漂着が目についただけに、これらの軽石は海からの漂着物を利用したものにちがいないと思った。二つの遺跡とも海に近い位置にある。

さて海岸を歩くと、漂着した軽石を多く見るが、大きさは一センチ程度の小さなものから、二〇～三〇センチの大きなものまで大小）。日本列島は火山列島であり、広い視点からは環太平洋火山帯の中に位置する、内外に火山系放出物に恵まれた環境にあるが、日本本土以外他地域の火山系島々からの流出も考えられるものである。宇田道隆氏の「海」（岩波新書）では、次のように述べられている。大正十三年（一九二四）十月三十一日に、八重山列島の鳩間島付近で海底火山爆発があり、大量の軽石が海面に噴出し、五ケ月後に大隅海峡、六ケ月後に紀州潮岬付近、八ケ月後に千葉県銚子付近へ、一年後に北海道の根室付近へ漂着している。対馬暖流に乗った軽石群は八ケ月後に対馬海峡へ、一年後に北海道西岸最北の礼文島に達している。海流の動きを知る上にも面白いといえよう。

原始時代における石器の原石（黒曜石やサヌカイト類）は、その産出地から交換等によって運搬されたものである。しかし軽石となると一部には運ばれたものもあるかも知れないが、用途としては「浮子」のみを考えると、軽くて浮かべばその目的を達するのであるから、石器の材料としての黒曜石等に比較して絶対に必要なものであるとはいえないのである。したがって「軽石」は漂着したものを利用したと推察される。

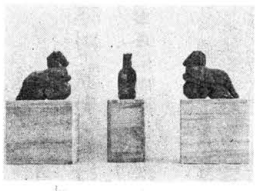
江戸時代の筑前国続風土記巻之二十九、土産考上には、次のように軽石について記している。『処々海辺にあり、是潮の泡の堅まれる也。又上座川に多し。是も水泡のかたまり也。大にして盆石にも用ゆ』とある。海岸に多く漂着するために、水泡のかたまりと考えているのが面白いし、海に寄ることがそれほどに多いものである。

がある。平均的には五～六センチ前後のものが多い。形も円形と、角のあるものに分けられる。表面を観察すると、エボシガイや海藻等が付着しているものもあり、色は灰褐色を呈したものと、乳白色のものがある。

軽石は『マグマが急に空中に飛ばされ、中に含まれていた水蒸気そのほかの揮発成分が逸散すると、多くの気孔をもった岩石片を生ずる。このようにしてできた多孔質の岩石片が軽石（浮石）という』（世界大百科辞典・平凡社）十月三十一日、八重山列島の鳩間島付近で海底火山爆発があり、大量の軽石

正月授与品紹介

一刀彫えと守「午」（うま）出来上る



正月、社頭で授与する恒例の一刀彫りの干支守は、今年は〝午〟〝馬〟である。今年は、十二支の中の第七番目。方位では南の方向。昔の時刻では真昼の十二時。現在の時刻で表わすと午前十一時から午後一時のあいだの時刻となる。

馬年は、昔から大いに飛躍する年、運が開ける年などと云われ、縁起のいい年とされている。

素朴な中にも優雅さをもつこの一刀彫の材質は〝楠〟であり、当社がこれをお守として授与するようになってから〝午〟は二度目である。

この一刀彫は非常に評判が良く、例年正月元日の内に売り切れてしまう。

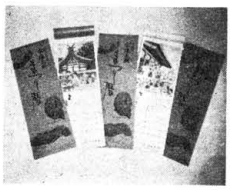
本年も数の上で制限があって、予約の受付で三〇〇体を用意しているが、もうすでに予約も締切りのところまできているような状態となっている。

授与所では、一般参拝者のために一月元旦、午前〇時を期して授与することにしている。

今年の馬君もなかなか良く出来ている。見るからに勇ましく、今にも跳躍しようとしている姿で象徴されている。

今年は景気回復の年といわれているだけに幸運を運ぶ〝午〟、開運神馬として、微笑ましい姿で参拝者の人気を呼ぶことであろう。

昭和五十三年度「まつり暦」



当大社の四季祭典行事を主体とした、「宗像大社まつり暦」の昭和五十三年度カレンダーがこの程完成、十二月中旬より社頭授与されることになった。

この「まつり暦」は、各祭典行事をイラスト形式にまとめたもので作者は、福岡市在住のデザイナー・広野　司氏である。大きさはタテ四五糎、ヨコ十六糎で、一月一枚の十二枚綴で、内容は前述の祭り風景、月毎の祭典、六曜等をコンパクトにまとめたものである。

授与方法は次の通りである。

・一部三〇〇円
（但し、祭典申込者無料）
・十二月十日～一月末日迄
（但し、一万部の限定版）

以上

◆一月祭典行事案内◆

◇辺津宮

一月一日	元旦祭	午前六時
一月二日	産業文化振興祭	午前九時
一月三日	元始祭・家内安全祈願祭	午前九時
一月十日	恵比須祭	午前十一時
一月十五日	成人祭	午前十時

◇中津宮

一月一日	歳旦祭	午前六時
一月二日	海運講社大祭	午前十一時
一月三日	弁天講社大祭	午前十一時
	酒造祈願大祭	午前十一時
	成人祭	午前十一時
一月三日	元始祭・大願祈願祭	午前十一時

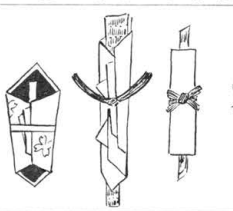
〔年中行事〕

快気祝（かいきいわい）
不快が全癒したときの祝いこと。病気の全快を祝うのをいう。全快祝・床上（とこあげ）祝などいっている。全快者は髪を整え、身体を浄め、赤飯を炊いて神に供え、また近隣者にも贈る。神に全快を「願（がん）かけ」した場合は、「願解（とき）」といって神に相当なものを供える。病床中の見舞者、見舞品を贈ったものには「床上げ祝」の贈物をする。現今では風呂敷、石鹸などが一般化している。石鹸は病気を洗い落すという意味があるという。

内祝（うちいわい）
内々の祝という意味であって、種々の祝い事の場合にはあまり公式にしないで、ほんの内輪同志つまり親戚・知人の極めて親しい者のみの間で祝の気持を表わすのであって、すべて内輪にするわけであるから、公式の場合と違って万事が略式に行われるのが普通である。内祝として相手方に進物などを贈る場合には、その包紙の表に「内祝」と書いて贈る。内祝には いろいろの場合があるが、出産祝・結婚祝・病気全快祝などがある。

祝儀（しゅうぎ）
祝儀とは祝の儀式という意味であって、出産祝・元服祝・結婚祝などを指す。また祝儀の際における祝意を表わして贈る品物、及び金銭などをも指し、祝儀の品は包紙につつみ、水引をかけ、のしをつけて進上した。引出物・かづけ物である。後には心付・チップの類も祝儀といい、現在ではこの意味が多く使われている。御祝儀にあずかるとは金銭などをもらうことであり、祝儀袋と称する金子などを入れてやる袋で、表に水引やのしが印刷してあるのを使用する。

のし
熨斗（のし）と書く。贈答品の表に水引（みずひき）を掛けた中央より上の右側につけて進物の印とするものである。

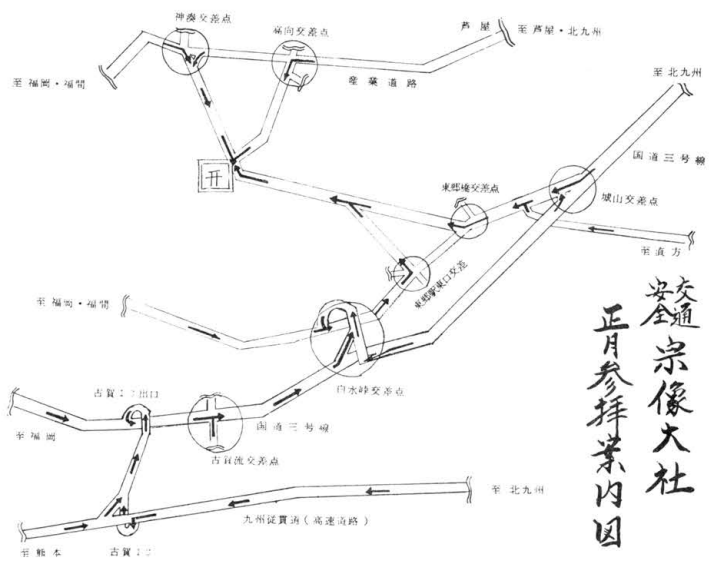


のしは方形の色紙を折りたたみ、中に熨斗鮑の細片を貼たつものであるが、近来では略式化したのは熨斗鮑を用いず、黄色の紙で代用したり、包紙にのしの型と水引とを印刷したり、「のし」と墨書きして進物の印とする。のしはもともと熨斗鮑の略である。一説では古く太刀・馬・鎧鞍・鐙を贈るときに熨斗を添える風習はなかったもいわれ、また熨斗鮑を添えるのも近世以降の風習らしい。江戸時代に伊勢家で整えた熨斗の包み形は、室町時代に幕府の料理の家であった大草家の式三献のとき引渡しの膳にすえる熨斗の包み形を受けたものである。そして特に近世では、一般に熨斗鮑は祝儀の食品として贈答品には必ず熨斗鮑を添える風習が広まったので、大草家の熨斗の包み形はこうした風習により入れられ形式化し、やがて贈答の装飾となり、いわゆる熨斗をつけるとは物を進上する意味になってしまった。

糊入（のりいれ）
紙の名で、糊入紙の略である。杉原紙に糊を入れて製したもので、贈物の包紙などに用いられた。

「知合入」に海苔が一帖、のりいれに長熨斗水引一とある。進物の包紙には通常奉書・檀紙・杉原・糊入などの白紙を二枚重ねて使用し、関西では杉原、関東では糊入を多く使用したともいう。

また絵画の擦刷にも用いられたので、「面白い糊入三枚で三分」「四書の間に三冊糊入れ摺り」の川柳もある。

正月参拝御案内

宗像大社への御参拝は、九州従貫道（高速道路）御利用の方は古賀インターチェンジを。福岡方面の方は香椎よりバイパスにて白水峠交差点を。北九州方面の方は城山峠交差点を御利用下さい。　国鉄御利用の方は東郷駅下車、徒歩5分にて西鉄バス東郷東口停留所、福間方面行便にて当社前下車。バス御利用の方は、急行、特急共宗像署前下車、福間方面行にて当社前下車を御利用下さい。